

昭和56年7月26日

第111回 史跡めぐり

越谷市郷土研究会

## 1 浄安寺 (浄土宗)

〒339 岩槻市本町5-11-46

TEL 0487-56-1072

住職 吉水大智

本尊 阿弥陀如来

建物 ・ 本堂 ・ 庫裡 ・ 山門 ・ 閻魔堂

寺宝 ・ 佛像多数

由緒 ・ 快樂山微妙院と号す。

当寺は往古、真言宗寺院であったといわれ、いつの頃にか廃寺になったのを、永正2年(1505年)天誉上人光蓮社了聞が再び開いて、現在の宗派に改めた。ゆえに了聞を以て開山としている。この了聞について、浄土伝燈総系譜には「天誉上人光蓮社了聞、明応元年(1492年)増上寺に住し、第5世となり、同年中足立郡花又村に実性寺を建て、彼所に退隠した」とある。また寺伝には、了聞は信州伊奈郡高遠(現、長野県)の人で、父は飯田監物直明と称し、母は野沢氏の娘である。はじめ禅林に入り、後に了譽上人の門に入り改宗して、明応元年江戸増上寺に住し、永正2年当寺を開き、同年7月8日入寂したとある。

天文年間(1532年~55年)に当時の住僧、縁菅稱念は自行の由に、

新に36珠の貫珠(念珠ともいう)というものをはじめて作り、今でも浄門ではこの珠数が用いられている。

慶長7年(1602年)には、徳川家康より寺領61石の御朱印を下賜されており、また寛永年間(1624~44年)には、越後少将忠輝の嫡子徳松、同母見相院共一時の岩槻城主阿部対馬守に預けられたが、見相院は寛永9年(1632年)4月13日、徳松も同年5月27日に卒去し、共に当寺に葬られた。

それ以前天正年間(1573~92年)には、太田氏房より当寺及び末寺の諸役免除の書状が与えられているが、貞享年間(1684~88年)の火災にて焼失し、今は徳川家よりの朱印状ともども、その写しを蔵している。

現住職は34世をかぞえ、東京日新寺住職の兼務となっている。

※埼玉宗教学鑑による。発行、埼玉新聞社。

## 2 竜門寺(曹洞宗)

〒339 岩槻市日の出町9-67

TEL 0487-56-1729

住職 吉田静司

本尊 阿彌陀如来

行事 ・開山忌

境内 8,580m<sup>2</sup>

建物 ・本堂264m<sup>2</sup> ・山門 ・鐘楼 ・不動堂

寺宝 ・刀(鎌倉期伝助真作重文) ・不動明王  
(伝慈覚大師作) ・太田家墓(元史跡)

### ● 掛軸 2幅

由緒 玉峰山と号す。

開山は格叟實越、天正15年(1587年)入寂。

開基は天文19年(1550年)佐枝(風土記稿には齊田とあり)若狭守。法諱は玉峰道全上座と号したので、山号はこの法諱より取って号したものである。

当山第19世巴山大休の宝暦年間(1751~64年)に、時の岩槻城主大岡忠光が深く帰依し、同宗の修業僧の道場となり、のち宗務所が置かれた事があった。

明治24年、火災にあい本堂など焼失したが、昭和41年に本堂他を完成、現住職で28世をかぞえている。

※埼玉宗教名鑑による。発行、埼玉新聞社。

### 3 芳林寺 (曹洞宗)

〒339 岩槻市本町1-7-10

TEL 0487-57-7670

住職 河津潤一

本尊 釈迦牟尼佛

境内 5,720m<sup>2</sup>

建物 ・本堂211.2m<sup>2</sup> ・庫裡 ・山門 ・不動堂

・鎮守社

由緒 太平山と号す。

開山は覺翁文等で、文禄4年(1595年)入寂。

開基は寺伝によれば、太田道灌の4代資持の弟美濃守が、母、茅林尼の菩提のため堂宇を建立して開基となった。後美濃守は三樂と称し里見家に加勢し、永祿11年(1568年)上総の地で戦死し、当寺に葬られたと伝えられている。

しかし風土記稿によれば、当寺は往古地蔵寺と号し比企郡松山にあったのを、太田大和守資高が母茅林尼追福のため、永祿10年(1567年)当所に移し堂塔を修造し、寺号を茅林寺と改めた。ゆえに資高を以て開基としている。さらに資高の墳墓が境内に建てられており、その銘には、当寺開基昌安道也居士、永祿12年8月23日と刻まれている、と伝えている。

文化8年(1811年)焼失し、天保12年(1828年)再建され現在に至っている。寺の西側にある墓地には、道灌の墓といわれるものがあり、11つの墳、何のためにかけたか不明ではあるが、黒漆をかけたあとが所々に残っている。

※埼玉宗教名鑑。発行 埼玉新聞社。

この寺は駿河国志太郡藤枝宿(現静岡県藤枝市)の洞雲寺の本寺で、開山は覚翁文等禪師である。松山城にあった頃、太田道灌は延命地蔵を尊信し、城の近くに堂宇を建ててこれを祀り、太平山地蔵堂と呼んだ。文明18年7月26日太田道灌が扇谷と杉の定正に、相模の糟谷で謀殺されると(彼の一族が家臣をはっきりしないが)、その遺髪を得て、地蔵堂のかたわらに埋葬し香月院殿春苑道灌大居士と諡して朝、夕回向をおこなうなかつた。

その後永正17年8月火災のため地蔵堂は烏有に帰し墓だけが残った。その後、道灌の曾孫にあたる太田美濃守三楽斎資正が松山在城におり、先祖の墓の敵の手中におちるニともおそれ、己れの本城である岩槻に移し、同時に地蔵堂も再建した。これが、この寺の前身である。再建した堂は大鐘を掛け、宝殿が空にそびえたとする。

(註・三楽斎資正松山在城のおり、岩槻で飼ひならした犬を松山に置き、松山で飼ひならした犬を岩槻に置き、犬の帰巢性を利用して、一朝ニあるニと、犬の首に書簡を結び付けて放し、松山-岩槻間の連絡をしたが、この世に謂う「三楽犬の入れ替え」戦術は日本軍用犬のはしりとして戦史に有名である)

それより先き、資正の母は禅門に帰依し、芽林妙春尼と称していたが、この母が逝去したので、資正は陽光院殿芽林妙春大姉と謚し、地蔵堂も再開基し、寺号を母の法号に因んで、芽林寺と改めた。

その後、資正の子氏資(父三楽斎を岩槻城から追り、北条氏の女婿になった)が、上総の三船台で討死したので、その遺骸もこの寺に葬り、太崇院殿昌安道也大居士と謚した。天正18年の岩槻落城により、一時寺は荒廃したが、徳川氏入国後、高力清長が岩槻城主となるや、その荒廃を歎いて大修理を加え復旧した。高力氏の子正長もこの寺に葬られ、快林院殿全室道機大禅定門とす。その後、再三火災にあり、現在の建物は幕末のモノである。云々。寺の西側の基地の中央に、道灌の墓といわれるものがあり、小さな雨屋の中に静まている。何故か、何時の時代にか、黒漆をかけたらしく、

その黒が所々に残っている。道灌聖屋の左手、ややさがった所に高力家聖屋があり、道灌墓と似たような宝篋印塔が祀られている。但し新記は「相伝ふ当寺往古は、地蔵寺と号し、比企郡松山にありしが、太田大和守資高、母芥林尼追福のため、永禄13年当所に移し、堂塔を修造し、地蔵寺を改め、芥林寺と号せり。故に資高を以て開基となせりと。境内に資高の墳墓たり云々」として、道灌の墓があるとは書いていない。この墓一説には里見氏との戦いで上総三船台で討死した太田氏資の墓であるとも伝えられているが、果にどちらを取らばよきであろうか。

勿論、道灌の遺骸を葬った墓というものは、彼が謀殺された相模の糟谷から、一里ばかりの秋山の洞昌院にあるのが真実の墓で、他は供養墓であろうが、その穿鑿は歴史家にまかせて置けばよからう。

私はこれを道灌の墓として、今日まで香華を献げ来た人々の、道灌思慕の気持を買おうとするのである。若し、そこに遺骸が埋まっていたら意味がなくなり、インパールで戦死した私の戦友達の墓もオベマ墓でなくなってしまうであろう。明治初年の廃藩置県で、岩槻県が設置された時、この寺に県庁が置かれたと伝えられている。

\* 埼玉大百科事典、発行所 埼玉新聞社による。

4. 浄国寺(浄土宗) 〒339 岩槻市大字加倉1-4-15番地。岩槻城築城と関係が深いと記載されている。  
太田氏と北条氏 TEL 0487-56-1039

岩槻城は太田道灌が長禄元年、右河公家に対して築城したものである。

城名の白鶴城のいわれは、道灌が築城の地を求めて歩いていた時、

この地で一羽の鶴がくわえて来た小枝を著しし羽を休めたのを見、用心深い鶴が降りる所なら、城としても要害の地となるであろうと、早速縄張りに築城したとよると言う。その岩槻城主として太田氏の最後のひととなった十郎氏房の開基となる寺が、この浄国寺である。新記は天正5年の創建としているが、寺の縁起では天正15年となっている。どちらが真を伝えるものだろうか。

太田十郎氏房は太田氏を継いでいるが、北条氏政の二男で、岩槻城主太田氏資の娘、小少将の婿となり、小田原から入ってきた人である。藤田氏の娘大福御前の婿となり、鉢形城主となった北条氏邦とまったく同様のケースである。(氏邦と氏房は、叔父甥の関係である) 小少将に犠牲という言葉を使って良いか悪いかは分ぬが、それが、北条氏の領国支配のための政略結婚であることは間違いない。記録がたしかではっきりとは言えぬが、(岩槻は人形の町だが) 小少将も人形のように可憐な女性であったろうし、また人形のように「自己」という魂は持たぬ哀れな戦国の女性の一人であったやも知れぬ。

しかし氏房は、小田原北条氏が大事に岩槻城の守りとして婿に入れた以上、人物も相当な者であろうし、事実彼は岩槻城の修築に領地の農業用土木工事に、商工業の保護奨励に見るべき治績を挙げている。民政に意を用うるのは父祖代々北条氏の家憲のようなものであった。

小田原の兄の氏直は凡庸であったが、弟の氏房はよく北条氏の伝統を岩槻経営に生かしたようである。尤も氏房が手腕家であったことは、小少将の幸不幸とは直接には結び付かないが――。



## 関東十八檀林の一つ

岩槻駅(東武野田線)前から、東武バス又は国際興業バスの「大宮駅行き」又は「片柳・北浦和駅行き」に乗り、バス停「加倉」で下車。大宮駅から東武野田線を利用して他、岩槻・幸手・春日部行きバスの便もあり同じ「加倉」で下車。降りた所が淨国寺の門前である。加倉は岩槻城の西部にあたり、加倉口合戦、加倉原合戦などのあった地である。おそく昔の淨国寺の山門は、バス停の近くにあつたのであろうが、今はない。参道を入ると右は植林に未だ日の浅い杉、右手は梅の木畑である。

そに中門。四足銅葺葺きの豪壮な感じの門で扁額は白字の「梅檀林」。この寺徳川の世になつてから五十石の寺領を賜り、浄土宗関東十八檀林の一つとなり、学徒の修行道場となつてゐる。

中門をくぐると、楓の植込みのある庭で、植木屋が植木の冬支度に余念がたつ。寺境は静寂そのもので、この寺の経営になる「みどり幼稚園」から、幼い者達の歌声だけが流れてゐる。

正門の仏殿は十三間と十間、建坪135坪、唐破風造り。箱棟作りの棟には金葉紋十一個を付けらる。もちろん葵の紋が物語によつて江戸時代(元禄十一年)になつてから再建の建物である。青い銅葺が美しく重厚である。仏殿の右手が茅葺きの屋根の棟に瓦をへせた庫裡と書院。これも幕末の重建である。その前に鐘の無い鐘楼がある。仏殿の左手に方形造りの仏眼堂がある。今仏眼堂は「報恩蔵」となり、等身大の地藏菩薩を祀つてゐる。仏眼堂の斜め前に「浄茶水」があり、

「東照宮岩槻御鷹狩りの折りが、当寺へ渡御ありし時、此水を汲みて  
 御茶とし、南無とせし所、其の水清水をるを称したまひしより。  
 日光社参の時は旧例に任せ献じ奉る」とあるが、これがなければ、  
 鑄物のポンプのただの井戸に過ぎない。が今も使っているのが嬉しい。  
 弘法の井戸だの、家康の井戸だのと言ふ所で、見世物にして汲まなくれば  
 水は淀んで腐ってしまう。この近くの寺にも太田道灌遺愛の釜と称し、  
 なまじ文化財に指定された為に、使わなくなり、錆びてしまった  
 例がある。寺の奥にこの井戸から水を汲んでは、お墓に上げて歩いている。  
 「あれです」と奥に指さす所に、徳川時代になってからの岩槻城主  
 阿部氏の墓がある。見上げような豪壮な大五輪塔で、  
 従四位阿部備中守藤原朝臣正次  
 従五位阿部備中守藤原朝臣定勝  
 などの名が見える。また仏眼堂の左手の藪の中に初代阿部氏の  
 夫人の墓もある。これも見上げような墓である。この寺阿部氏の菩提寺  
 にもたっており、仏眼山英隆院、「英隆院」は阿部氏の院号である。  
 本尊の弥陀三尊は安阿弥の作と伝えられ、記主禪師の信仰したもので、  
 その後定恵上人が譲り受けて鎌倉光明寺の本尊とした。その後また  
 移って記主禪師の創立した鴻巣の勝願寺の本尊となり、この寺の創建に  
 あたりまたまた譲られてこの寺の本尊に納つたものと言う。この寺の開基は  
 前述のように太田十郎氏房であるが、開山は田蓮社総持清巖である。  
 この清巖は初め勝願寺の住職であったが、十郎氏房に寺地を寄附され  
 その隠居寺として建てたのが、この寺の始まりと云う。

## 仏眼舍利のご利益

仏眼舍利宝塔。これは五十五センチ余の塔だが、塔そのものは江戸時代の作である。そしてこの塔内に納められている水晶のように美しく澄んだ仏眼舍利については次のような言い伝えがある。

この舍利宝珠は、唐の玄宗三歳が天空へ渡って、那蘭陀寺から頂へ来、当時の皇帝に奉じたもの。その後、玄宗皇帝は楊貴妃のため、日本の朝廷へ勅使を立て、七種の宝を贈ったが、その七種の宝の一つがこの舍利である。その後長くこの宝珠は熱田神宮に奉納されていたが、淨国寺開創の時、寺に寄贈され、永く淨国寺の靈宝となった。

城主氏房はこの話を疑い、宝珠を石の上に置き、鉄槌でこれを打たせた所、台にした石は砕け、鉄槌もくぼんだが、舍利には少しの異状もなかったばかりか、却って益々光明を放ったので、氏房は大いに驚き、我が心に疑いを持ったことを懺悔し、改めて宝珠を尊信し、この寺の山号を仏眼山とした、という。毎年三月五日を「仏眼忌」と称し、この舍利宝珠を本堂でお開帳し、有縁の人々に拝んで貰っているという。この寺、元禄年間火災にあり堂宇を焼失したので、この仏眼舍利を江戸でお開帳したが、足のお賽銭で富くじを買ったところ、続けざまに三度あたりくじが出、忽ちにして寺再建の資金ができたという。そこでこれに因んで、巾着三個を連れたものを図案化し、寺の定紋にした。この紋を福利紋巾着という由である。宝くじファンはこの仏眼舍利を拝んで、そのご利益にあやかるべきであろう。

その他、氏房判物。満誉大僧正文五箇状（関東諸寺家掟之事）。

家康判物。檀林印可階定書。元文四年から文久三年に至る七十六冊に

及び日鑑なども拝見させて頂いた。

## 5. 遷喬館

岩槻藩(大岡氏)の藩校。寛政九年(1797)8月以来、大岡家第五代藩主忠正の侍読を勤めていた児玉南柯が、同11年3月岩槻城下廓内裏小路の一角(現岩槻市本町)に設立した私塾を始めとする。設立時に南柯が作った「遷喬館会約」は五ヶ条から成り、よくその教育目標を示す。第1条は学問に励む者が同じ志の友を求めて切磋琢磨し、その業の成るを「鳥の幽谷より出て喬木に遷るがごとく」進むのを期待し、塾名としたことを記す。この私塾遷喬館が、文化二年(1805)以降同八年の間に藩庁に納入されて藩校となり、正式な名称を勤学所とつけた。遷喬館時代の教官は南柯を中心に、彼を助けるものとして高橋多門・高木東一・佐野牧太・田部井清・小林源吾・豊島平治らがいた。勤学所の職員は頭取一人・世話役(人数不明)・会頭2~3人・目付10人・館中目付4~5人などであった。遷喬館時代は近村豪民の子弟が含まれていたが、勤学所となったからは、藩士の子弟に限られた。6~7歳の頃より入学し、15,6~20歳頃修了、在學生は40人ぐらいい、束脩は200文~250文程度であった。遷喬館時代の経費は、南柯の私費で賄われ、ほとんどの門下子弟からの謝礼があったが、勤学所時代には藩主忠正の経済的援助が増え、文化3年には多年にわたる経営の心労が報われ、金五両を賜った。遷喬館での授業は四書五經の素読から入り、史記・淮南伝・和漢の歴史書・群書類従を用いた。勤学所は課程を素読生と講義生に分け、

素読生は孝経・四書五経から入り、日本外史・左氏伝・古文真宝・文章軌範・皇朝史略・文選などを、毎日五ツ半時(午前9時)より四ツ時(午前10時)過ぎまで学習した。講義生は論語・孟子より始め、左氏伝・史記・漢書・唐宋八家文・詩経・書経・礼記などを、毎月9日くらいに本校し、頭取の講義を聞き、学業の進歩した者は頭取の前で講義を行い指導を受けた。ほかに毎月四の日は生徒を筆で講書を行い、論語や孟子を講義し、九の日は素読生の学習を休み、躰方と称し小笠原流による礼儀作法を課した。さらに月一回は詩文会を催したが、ときには他藩から学者を招いて講義を聞く場合もあった。勤学所における試験には教官が行うものと、藩主自ら行うものがあった。この試験の成績と平常の学習活動により優秀なものを藩の目付に抜擢したり、藩費で昌平學や江戸に游学させるなどに勉学を奨励した。なお、当館の建物は現存し、県指定史跡となっている。→児玉南柯

※ 埼玉大百科事典I 発行所 埼玉新聞社。

## 6. 岩槻の時の鐘

所在地 岩槻市本町6-2-28。寛文11年(1671)、当時の岩槻城主阿部正春公が城内、城下のくたに時刻を知らせるために鑄造した。五十年後に火災のため焼け落ち、鐘に亀裂が生じ音響が悪くなったので、享保五年(1720)、岩槻藩主永井伊豆守直信公が改鑄したのが現存の時の鐘である。俗に「岩槻に過ぎたるものは」あり、児玉南柯は「時の鐘」とよばれたという。

※ 埼玉大百科事典Iによる。発行所 埼玉新聞社。

7. 遷倉館との関係事項。岩槻藩

岩槻城は太田道灌が古河公方に備えて築造したものである。その後北条氏の関東進出に太田美濃守資正が、この城を本拠として抵抗したが、足利氏資の代に北条氏に属し北条氏の滅亡とともに太田氏の在城は終った。徳川氏が天正18年(1590)関東に入国すると、同年八月高力河内守清長に三万石の所領を与え岩槻城主とした。これが岩槻藩の始まりである。以後歴代の城主を示すと次の通りである。

1590(天正18)8月 高力河内守清長(2万石)

1599(慶長4)3月 高力土佐守正長(〃)

〃(〃)3月 高力摂津守忠房(〃)

1619(元和5)9月 高力氏波松転封により藩城

1620(〃6)10月 青山伯耆守忠俊(4.5万石)

1623(〃9)10月 阿部備中守正次(5.6万石)

1638(寛永15) 阿部村馬守重次(9.9万石)

1651(慶安4)4月 阿部備中守定高(〃)

1659(万治2)1月 阿部伊予守正春(11.5万石)

1671(寛文2) 阿部備中守正邦(9.9万石)

1681(天和1)2月 板倉内膳正重種(6万石)

1682(〃2)2月 戸田山城守忠昌(5.1万石)

1686(貞享3)1月 松平伊賀守忠周(4.8万石)

1697 (元禄10) 4月 小笠原佐渡守長重 (6万石)

1710 (宝永7) 5月 小笠原山城守長瀬 ( " )

1711 (正徳1) 2月 永井伊豆守直敬 (3.2万石)

" ( " ) 6月 永井伊質守尚平 ( " )

1714 (正徳4) 8月 永井伊質守直陳 ( " )

1756 (宝暦6) 5月 大岡出雲守忠光 (2万石)

1760 (宝暦10) 6月 大岡兵庫頭忠喜 (2万石)

1782 (天明2) 3月 大岡式部少輔忠要 ( " )

1786 ( " 6) 9月 大岡丹波守忠烈 ( " )

1797 (寛政9) 3月 大岡主膳正忠正 ( " )

1816 (文化13) 10月 大岡主膳正忠国 (2.3万石)

1852 (嘉永5) 6月 大岡兵庫守忠恕 ( " )

1866 (慶応2) 3月 大岡主膳正忠貴 ( " )

以上の表によればわかるように、江戸中期までは領主の変動が甚しく、その所領の範囲もそれに伴って変った。県内の所領は阿部氏時代が、埼玉郡・足立郡にわたり89か村約3万8千石であったが、幕末期にはおよそ埼玉郡南部を中心として38か村1万6千石程であった。その余の所領は他国に散在していた。大岡氏時代の所領は宝暦6年(1776)には武蔵・上総・安房・常陸・山城の5か国に106か村に2万石で、文化八年(1811)1部に換地が行なわれ、忠国の弘化三年(1846)5月に武蔵・上野二か国に三千石加増され、以後、版籍奉還まで二万三千石は継承されて維新时期における領地は次表の通りをた。

草高は三万三千石余に達していた。家臣団の構成は幕末期の限帳に於て総勢281人、ほかには足輕、同心、中間が100人程いたといふ。家臣の役職と人数は次の通りである。

年寄4人、用人5人、用人格3人、物頭上席共6人、郡奉行4人、勘定奉行2人、大目付4人、側目付1人、物頭次席2人、寄合並席12人、供頭1人、給人18人、納戸4人、許使番1人、書翰1人、次給人23人、給人格10人、給人格末席1人、医師5人、近習4人、末席医師5人、供目付3人、中小姓25人、同末席6人、代官2人、馬役1人、次中小姓23人、同末席10人、目見席10人、徒目付7人、徒目付格3人、徒小頭3人、徒士12人、同末席13人、徒士格3人、同末席2人、坊主権ととも14人、合計281人。このうち家禄を有する家臣はきわめて少なく、全部で57名を数えた。次表の如く高は最高250石から最低40石までであった。

明治元年5月、官軍東征の際には官軍側に降順、東山道総督府の命を受け、幕府の脱兵を追討した。明治4年7月廢藩置縣により、280年にわたる岩槻藩は廢止され、岩槻城を取り壊されたといふ。

大岡家家臣禄高表

石高	人数
250石	1
105〃	1
91〃	1
77〃	1
70〃	1
62〃	41
60〃	5
50〃	2
40〃	4
合計	57



## 岩槻藩校

岩槻藩の歴代の大名の中で藩校を設立したのは、宝暦六年(1756)から明治二年の版籍奉還までの八代113年にわたって領主であった大岡家だけである。大岡家第五代忠正は寛政九年(1797)8月までに致仕して以後、児玉南柯を召して侍読とし、かたわら藩士の教育を命じた。南柯は寛政11年3月、54歳の時、私塾としての遷喬館を岩槻城外廓内裏小路の一角(現岩槻市本町)に設立、藩士の子弟のほか、近村豪民の子弟をも含めて教育した。この私塾遷喬館がやがて忠正とその実父加納遠江守久周(上総一宮城主)の援助により藩庁へ献納されて岩槻藩校となった。その時期は文化二年(1805)以降文化八年中といわれ、藩校の正式名称は勤学所であったが、なお遷喬館の名も用いられた。また藩主忠正は文武両備の教育を理想とし、南柯の建言による文化八年勤学所と同敷地の外廓内裏小路に武芸稽古所も設立した。→遷喬館、\*埼玉大百科事典I、発行所 埼玉新聞社による。

## 8. 洞雲寺(曹洞宗)

〒339 岩槻市大字加倉1309番地

TEL 0487-56-1730

住職 石井昌徳

本尊 釈迦牟尼佛

境内 3,300㎡

建物・本堂・庫裡・山門

寺宝・山門